

マルコによる福音書 14:12—25

「裏切りと祝福」

2026年6月14日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

主イエスは過越しの食事をするための場所を、弟子たちに先に行き、用意をするようにとお命じになりました。主イエスが前持って話をつけておられたのか、ひょっとすると前の晩かなにかに、神が家の主人に夢でこのことをすでにお告げになっていたのかもしれませんが。「あなたの召使いが水場から帰ってくる時、二人の男を連れてくる。その二人は『先生が食事をする宿を捜している』と言うので、その人達を受け入れなさい。そのために席を用意しておきなさい」など。実際に何が起こったのかはわかりませんが、このように過越しの食事の席も神がご用意なさったということでしょう。すべてが神のご計画どおりに進んでいます。

本日の箇所は「除酵祭の第一日、すなわち過越しの子羊を屠る日」と日付を示して始まります。先週の箇所、14:1は「二日前」と記されていました。十字架へのカウントダウンです。あと丸一日しないうちに主イエスは十字架につけられ、息を引き取られます。この第12節の言葉にはカウントダウンに加えてもう一つの意味があります。過越しの子羊を屠る日、つまり、あの出エジプトの出来事を思い起こす日です。主イエスがその後弟子たちとお食べになる夕食は過越しの食事です。この日は奴隷の状態から神がその民を救い出された記念の日なのです。神はこの時に、もう一つの「過越し」つまり神が民を裁きから逃れさせてくださるために主イエスの十字架という過越しを実現してくださったのです。あの出エジプトの過越しでは、エジプトの民が泣き叫び、イスラエルの民が助けられました。この主イエスの過越しでは、主イエスが叫び、イスラエルの民が救われるのです。

主イエス・キリストは、十字架につけられました。これは、教会の信仰のいちばんの中心でだと言っている事柄だと思います。しかしこの十字架というのが、いちばんわかりにくいことではないかとも思います。教会生活が長くなるとわたしたちは十字架、十字架とつい簡単に口にしてしまうところがあるかもしれません。けれども、なぜ神の子が十字架で死ななければならなかったか。このことを語るのが説教の一番大切なことなのですが、それでもなお難しいことです。そしてこの十字架が人間の救いだというのが教会の信仰なのです。これは、信じるしかないことです。神が主イエスによる救いのご計画をこのような形で実現なさったからです。十字架の悲惨と、その悲惨を引き起こした人間の罪と、なおその十字架が愛の業として救いをもたらせた、わたしたちはこのことを繰り返し聖書から聞くことで信じる、信じる続けることができるのです。

カウントダウン、もうカウントが終わろうとしているわけですが、この第14章は非常に興味深い書き方がされていると思います。教会で「主イエスの受難」と呼ぶ場合、その聖書はこのマルコによる福音書でいえばこの第14章と第15章のことをいいますけれど、この第14章は受難の暗さばかりが描かれているわけではないのです。先週聞きました

たように、指導者達の殺意がついに現実になろうとし、ユダは裏切りを実行しようとするそのさなかに、一人の女性が、高価な油を壺ごと注ぐという愛の業を行いました。主イエスご自身、このことで励まされ、またこの行いは教会で永遠に語り継がれることになりました。本日の箇所も、過越しの食事の時に主イエスがなされたのは、誰かが裏切る、という話です。弟子たちは不安にかられ、疑心暗鬼になります。確かに裏切りはおこります。そこでなお、裏切り者がいることを知りながらも主イエスは、パンをさくことと杯を飲むことによって弟子たちを祝福なさるのです。

主イエスは十字架に向かわれます。それは単に肉体の死に向かわれるものではありません。殺意と裏切り、そして忠実だったはずの弟子が、「あんな人知らない」と言い、さらにすべての弟子が去ってしまうという孤独の道を歩まれるのです。神の子なのに、何の罪もないのに死ななければならない、十字架はそういう道です。主イエスご自身が「できればこの杯を取り除いてほしい」と神に願って祈り、「わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と問わざるを得ない道です。しかしなお、そこへ向かう中、弟子たちを愛され、聖餐をお定めになりました。それもすべて神の御心なのです。罪が渦巻く中でも人間の愛があらわれる。そして、主イエスの愛こそが、弟子たちに注がれます。十字架へいたる受難の出来事そのものにすでに神の愛が、人間の罪の中に現れているのです。

主イエスが、自分と食事をもっているこの中の一人が裏切ることを予告なされた時の弟子たちの反応はちょっと不思議なものでした。「まさか私のことでは」とみなが言ったのです。何か心当たりがあったのか、あるいは、もう何が起こっても、自分が思ってもいないことをやってしまうほど事が起こっても不思議ではない、ということだったのかもかもしれません。けれども、弟子たちは自分のことばかりを気にしており、誰も主イエスご自身が裏切られるという痛みを思う者はいませんでした。そして、この裏切る弟子とは直接はユダだったわけですがけれど、最後には、ペトロが「あんな男は知らない」と否定し、十字架にいたる時には弟子たちはみな逃げてしまいました。ユダだけでなく、12人全員が主イエスを裏切る者となってしまったのです。

この「裏切る」という言葉は、新約聖書の他の箇所には、受難において大変大きな意味をもつ「引き渡す」という言葉であらわれます。主イエスの受難予告では「わたしは指導者たちに引き渡され」とおっしゃっていますし、ユダは「主イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけ」ました。この後に出てきます、主イエスを捕らえたこの指導者たちは、ピラトに主イエスの身柄を「引き渡し」ます。「引き渡す」のは、もうこんなものいらない、と手放すことを意味します。単に不要だというだけでなく、時に、ユダのように対価としてお金を受け取ることもあるかもしれませんし、自分たちの願望を実現するために、引き渡したのが祭司長、律法学者たちでした。主イエスをお金に替えるために、また自分たちの保身・願望・欲望のために、「引き渡した」のが受難の出来事なのです。

ユダがどうして裏切ったか、主イエスを引き渡したのか、マルコによる福音書は理由やユダの気持ちは記していません。「金を与える約束をして」という言葉からお金が目的だ

と考えられていたこともありましたけれども、今はあまりこのようには考えないようです。このイスカリオテのユダはここまで主イエスに従ってきました。このことを忘れてはならないと思います。ユダもまた、主イエスを信じていたし、愛してすらいたはずです。この方こそわたしたちを救ってくださる、と信じていました。ところがユダがきづいてきたことは、どうも自分の求めている救いと、このお方がなさろうとする救いはずいぶん違うようだ、ということだったのではないのでしょうか。愛するがゆえに、その思いがすれ違った時に、憎しみに変わる。「裏切り」というのはもともと仲間でなければできないことです。最初から敵同士の場合は裏切りと呼びません。引き渡す、といったとしても、もともと自分の側にいなければ引き渡すことはできないのです。愛の悲しい姿だと思います。単に敵対していた指導者が策を練って、不当な裁判で死刑にした、という話ではないのです。ここまで信じてきたはずの弟子が裏切ってしまう。一番弟子だったはずのペトロが、「あんな男知らない」と言ってしまう。人間の罪は単純ではないばかりか、これほどまでに悲しいことなのです。このことに主イエスは命をお捨てになりました。

しかしなお、主イエスはともに食事をなさいました。わたしたちが受け継いで聖餐式と呼ばれることになる、パンをさき、杯をわけて、「私の記念として行いなさい」といったこの祝福を、ユダも受けているのです。けれども、ユダの裏切りが軽くなるわけではありません。帰って重いものになったはずです。それにしても、神が救いのご計画のために、ユダの裏切りを準備したことはなかなか理解しがたいことです。ユダも終わりの日には赦され、救われるのか、ということはずっと続く大きな話題です。けれども、いくら考えてもいったりきたりするだけです。いろいろな理由をつけて考えること自体は意味があることだと思いはしますが、しかしなお結論はわからないことは認めなくてはならないと思います。ただ、終わりの日を待つしかない、と思うのです。しかしそもそも救いが十字架によってなしとげられること、そのものが理解できないことでもあります。主イエスご自身「人の子は、聖書に書いてあるとおりに去っていく」とおっしゃったように、これもまた神のご計画であり、そのように受け取るしかないことなのでしょう。けれども、主イエスはユダも愛しておられた、このことだけは間違いのないことだったと思います。

そうして主イエスはここで弟子たちにパンをさき、杯を分けられます。冒頭でこの食事は過越しの食事だということがわかると申しました。それで今回気づいたことがあります。レオナルド・ダ・ビンチがこの場面を描き、とても有名になりました。「最後の晚餐」と言います。けれども、この食事は過越しの食事であって、決して「晚餐」と呼ばれるような豪華なものではありませんでした。正確にはわたしもわかりませんが、種がはいっておらず膨らまない味気ないパンと、苦菜という苦い野菜、羊はごちそうといってもいいかもしれませんが、あとは、セロリの塩漬けや果物のペースト。これらはいってみれば日本のおせち料理のように一つ一つに意味があります。もちろん出エジプトにまつわる意味ですが、どちらにしても豪華な食事ではありませんでした。それで調べてみた所、絵画の元のイタリア語では単に「最後の食事」という意味の題名だったのです。ちなみに英語で

は”The last dinner”ではなく、”The Last supper”とあって、簡単な食事を意味する supper という言葉が使われています。「晩餐」と呼べるような食事ではなかったのです。その事実を汲むなら「最後の夕食」か「最後の夕餉」くらいが良かったのではないかと思います。絵画の題名の翻訳はいいとしても、この聖書の小見出しはそうした方がよかったかもしれません。しかしなにより、ここで主イエスは、救いを実現されるために、自分をどんどん貧しく、低いものして、ついに命すらもおすてになりました。最も低く、小さくなられたのですから、食事は質素であることに意味があると思います。

そこでもう一つ考えなければならなくなったことは、わたしたちの礼拝の「聖餐」という言葉です。聖なる晩餐なわけで、これもやはりふさわしくないということになるのでしょうか。教会の伝統では、ここで主イエスが「感謝を献げて彼らに与えられた」という中の「感謝」という言葉からユーカリストと呼んでいます。「感謝」でも「ユーカリスト」でも日本語としてはちょっとしっくりきません。何か別の名前を変えた方がいいのかな、と一瞬思いました。けれども、ここで主イエスは、杯について「これは、多くの人のために流される、私の契約の血である」とおっしゃったあと、「神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から造ったものを飲むことはもう決してあるまい」とおっしゃいました。ぱっと聞くと意味がすぐにわからないかも知れません。けれどもここでおっしゃっていることは「神の国が来る」ということです。主イエスが最初からおっしゃっていた「神の国が近づいた」ということは、本当に実現する。その時、新たにぶどう酒を飲もう。神がまことにともにおられる食卓につこう、とおっしゃるのです。この食事に参加する者にとって、主イエスの死を理解するだけでなく、主イエスがおられなくなる間も希望を失わず、約束してくださった神の国において主イエスとともに食卓を囲むことがゆるされることを待ち望んで生きるようにとの励ましと、教会の歩むべき道筋が示されるのです。

主イエスも終わりの日のたとえとして結婚の宴のたとえを語られました。終わりの日の食卓は全員で囲む大きな食卓にちがいありません。わたしたちの聖餐には、受難の時の質素でこれから死へ臨む食事と、終わりの日の希望の中に与らせていただく完成の食卓の両方の意味があるのです。ですから聖餐でも決して間違いではありません。あえて私の個人的な好みを言わせてもらえば、呼び習わしていますように「主の食卓」というのが一番いいように思えます。

主イエスの声が、この教会に響きます。「取りなさい。これは私の体である」。「これは、多くの人のために流される、私の契約の血である。」先週の主日には聖餐に与ることができました。離れていても聖霊によって同じ食卓にいると信じて訪問聖餐を行っています。今日は私たちは聖餐を祝うわけではありませんけれど、わたしたちのこの礼拝堂の中心に常にこの主の食卓を置いているのは、礼拝でいつもこのキリストの言葉を聞き続けているからです。主イエスが十字架でその体をさき、血を流してくださいました。ここにわたしたちの罪の赦しがあり、新しい命があります。